農業ガイド986号　2014年11月29日
ビート　「西部萎黄病」　残さ処理、防除の徹底を

十勝では今年、ビートの葉が黄色になり、光合成ができずに糖量が上がらなくなる病害「西部萎黄（いおう）病」が多発した。北海道てん菜協会（札幌市）などは今月、対策をチラシにまとめ、全道のビート農家約8000戸に配布して対策を呼び掛けている。

十勝で多発　糖業界「来年へ対策必要」

西部萎黄病は昭和40年代にオホーツク、1990年前後に胆振、2008年には十勝などこれまでも多発した年はあった。ただ、近年は感染が拡大傾向にあるため、同協会は13年から北海道農業研究センター、道総研農業研究本部に委託し、３カ年で多発要因の解明と被害低減の対策を進めている。

今年は特に十勝管内で多く発生し、糖業関係者によると「今年ほど出たことはあまり記憶にない」という状況。同病が影響したかは不明だが、オホーツク管内のビート糖度が17％を超えているのに対し、十勝は16％台となる見込みだ。

同病はモモアカアブラムシ、マメクロアブラムシなどによって媒介されるウイルス病。米国西部で発見されたことから、その名が付いた。ウイルスそのものを除去する方法は現在、見つかっていない。

対策を呼び掛けるチラシは、道てん菜協会、ＪＡ道中央会、道農民連盟、日本甜菜製糖、ホクレン、北海道糖業が連名で１万3000部を作製。収穫後からできる対策を掲載した。

チラシでは①保毒源を取り除くこと②アブラムシ防除の徹底－の２点を呼び掛けている。保毒源の除去では、発病株のビートトップや掘り残しが翌春の周辺圃場（ほじょう）への感染源となる可能性があるため、収穫残さを土壌にしっかり埋め込むよう求めた。

病原ウイルスはビートの他、ホウレンソウ、白菜、キャベツ、カブ、ブロッコリー、カリフラワーなどの作物や一部雑草にも感染することから、越冬ハウス内のこれらの作物、雑草を処分する必要性を挙げている。

アブラムシ防除では、移植直前に殺虫剤を育苗ポットに「かん注」することが防除の基本とし、茎葉散布は直播（ちょくはん）栽培で行い、多発地域では移植栽培でも併用するよう求めている。

日本甜菜製糖農務部の斎藤英俊部長は、「全道的に話題になっている。かかってしまうと治らないため、かからないようにするしかない。なぜ多くなったのかは分からないが、手をこまねいてはいられないので、来年に向けて対策を進めるしかない」と話している。

農業ガイド991号　2015年1月17日
2015年産作付指標まとまる　小豆価格下落で1500㌶減

道農協畑作・青果対策本部は、2015年産の畑作物作付指標面積をまとめた。十勝では、近年豊作が続き価格が下落している小豆が前年に比べ約1500㌶減に。ビートは３年連続で、前年実績を基にした実効性の高い「実践指標」を設け、経営所得安定対策の交付金アップなどを受けて約300㌶増とした。

2015年産 主な畑作物の作付指標

単位:ha		全道		十勝	
		15年指標	前年比	15年指標	前年比
麦類	小麦	11万8148	6648	4万5039	2179
豆類	小豆	2万2000	−3000	1万2460	-1520
	金時	6500	±0	5460	±0
	手亡	2500	±0	2220	±0
	大豆	2万7330	2680	5310	1410
	黒大豆	2000	200	250	-150
ジャガイモ	生食	1万7437	333	6872	33
	加工	1万3649	275	8838	82
	でんぷん原料用	2万2200	±0	6376	14
	種子	5357	−106	2267	-27
	小計	5万8643	502	2万4353	102
ビート		6万6000	±0	—	—
実践指標		6万0288	1448	2万6025	294

指標面積は主要４品の麦類、豆類、ジャガイモ、ビートについて、地域の輪作体系と需要動向を踏まえて決定。今回からＪＡごとの作付計画面積ではなく、行政も入った各地域の農業再生協議会の策定した「地域輪作計画」（管外では水田フル活用ビジョンも含む）を基礎に、各作物の需給状況や政策などを踏まえた指標を設定した。

■豆類

小豆は、全道の指標面積は前年比3000㌶減の２万2000㌶に設定。14年は作付面積が指標を1300㌶上回る２万6300㌶となり、収量も良かったが、需要に対し供給量が多くなりつつあることから削減された。十勝は1520㌶減って１万2460㌶。近年、作付けが十勝に集中していたため、不作のリスク回避として指標面積が増えた他地域も